夢見草
八百韻書截
羅文君追薦
合本

全

イ曾4
600
108

特
門 イ曾 4
號 600
巻 108

東園舎羅文輯

夢見艸

曲亭馬琴補正

今茲寛政九年丁巳三月丙寅
先考〔号可蝶〕及母氏〔吉尾氏〕相當遠
芳本然两忌也先人嘗嗜俳諧
之連歌以其所好之風流供養
像前而祀之親族咥焉朋友和
焉句々既成一日俳席心頓入
佳域今夕披講勝誦佛經矣

賦何駒俳諧之連歌追善百韻

像前披講

歎仰く春やむかしの月日貝　瀧澤氏 羅文

花ちりてし海山の恩　瀧澤氏 馬琴

旅とくに出し葛と隣の友垣に　豊田氏 蕨山

笠一とりおき志すし何ぞに　遠山氏 枫遊

地車に石つきよせ綱引　兼子氏 新賀

自在に城乃番鍋ちらしいる　松居氏 時得

銀扉の脊中にさそふ落氷　伊藤氏 路洲

頭巾出るもとし主ていかる　執筆

右一順余略く

懐舊

此孫生まれつもりし娘しおやのことの葉に
あまりほと案せし月日たちしれハ墓所
すくたのうかねこてて少子そうかうちのる

わきに石を安いかぬ　賜あるまじき
　なほいたしへと思ひまゐらせ侍り

あすの日の土ずれ菫の花の跡　羅文

二十余年花や清めし墓の苔　馬琴

　桐蔭の思ひいとしゆかしくくくある
　画像一幅を作り侍り

みどりの月をはつ秋や家の風のこゑ　素外

〇

我をおもひ桜を思ふ二むかし　羅文叙文　新賀

　阿嫂の十三回忌を営むなる我も志を
　こゝろいろせ可憐の思ひとゞも追善
　いとなむよし羅文の許より告らしけるまゝ

追善やつれなるはいくし

聖の法や集つく春の名残思ふ　素外

このうらばは山よりくるし花の雲　羅文女　鈴木良妻　秀

父ハ五十三のとしに落し
母も八十二のとしにこの比なれば

こゝちゝ母梅や桜の青葉山

羅文女
田口氏妻
菊

○

落ゆくも忘れぬ影を一遍桜

通家
路洲

舊識
ちりさき暑く

踊る人法の花や蓮花草

袖のうら
雪旋

軒さくや人来もなきの善智識

蘋山

切ぬる香も芽しさく桜

時得

菱桜やこれも日向の縁所

梳遊

○

生まれしや利茶の手向物

うつしの
蛙水

附録

このたび親忠のおもひにいろは一ぜ後行く
天明丙午の八月ふきの下めでとよし
兵輔の母子一遍の追福に手向侍る

こゝの翁のある忌日や仲の秋　馬琴

おなしころを

ゆかしく花の筒中秋乃宵　羅文

○

七月廿九日こゝろあるむすめうしなひぬ

なにかそのあとに営む日ごとに回向給ハ

いとしくおもひおはしく

菓子あらしく孫とふ魂の気味なる　羅文

おなしく

萩かしく山の端ところ淋し　児桜

羅文妻

おなしく附中つかりける

けのさきぞ子を見せなり　華雲若　馬琴

されどもしく思ひ外ん花於雪　同藩　逸聲

こぬ外ばるまよりくとくして親族朋友乃

頼みの文章なくしくきて志けり侘こゝる

とらしし　旅

寛政九年三月廿六日

東岡舎　羅文
曲亭　馬琴
謹誌

身のうへの事ぶきにゑ[illegible]く羅文子のかりにおり
けるに[illegible]馬琴子と[illegible]ふるまをとも[illegible]

嵐ふく日もありけるよ花の雲　雪庭

さるハ[illegible]の日の御集[illegible]よし[illegible]卯月中比の
使[illegible]逃く[illegible]

寛政九年巳二月八日之夜
八百負書拔
仙[illegible]主人

第一　兼題上十句

秋句

浅草はしに酔ふくしも行ひ

七
二階の窓に宮の手のくぼ

乳花の尾にも秋の声も㒵

十
兼好が時も机にいふまでも

能登しげし住錦　服部蝶葉

○
間へしばしあひぬ錦の味

問へとも答もあらぬ　漂木

七 夕皃の花をおさへるあふき哉
霞くも鐘の打目ふくれる

七 櫻咲主ある人の濁せく
寺ゆかり剥る淋し　調峨

十 雪白妙に花　康皆
雲おふ杜もとめつ垣見え

八 庵鶴に詣られ遅の禅笑む

眠もし通りまゝひの溝へんまで

七 汻柳を萌へし出ひし引　籍
畫中の僊女織らし緑旡毛

七 手等毛淋し体桑らし葉る
こもり人花さく杉葉を庭にはけ

八 花摘の指の同さ　磯康
燕なかゆりてつれし比　燕府

七 簾さく紀の不二も雪をます之

比良の水に琵琶の名人

十二
二三すゞ子明きて弄ゝ中

第二　集上十句

十五
あそびの友くるゝしき　里住居
蟖に涼しさもまさりけぬ蝉
夕しほにまさる小草の夜中

七
桂に見る似たる似如柳の風の音

剃て厠をよく覚ゆる

七
花の咲所を答の温泉の月
清盛の似たる叶ふ窓の月

七
玉子の葛のうへし　指し庭
大服ぎるといかめしく見え

七
花の雲文群集の中をさしよる
二口目の年より大歓ん

七
東風吹くゝ細き響る笛の笙

七
やどに蛛の這ひ出し小松原
井のもとへし汲て撫綿
卜筮の笠の宿に暮れて
十
多田の薬師もめし夕景
くしのやくしもめし夕景
七
経へは蜀も眼病の一節に
はは遠し　廿五菩薩の影
○
霊験は山の月声は瀧汁

第之　集上十句
七
声中さく兎曲もよ似る重宝
腰に文とはしるくぬ外香
底移し唐の瑞によるを恋く
八
身請四郎か浮んしく放く
はつの浮の裏を狩師
十一
技葉守一の宗匠に会のも

中庭の花を踏をる上草履
七 不二ハ巻て居する樓
よ絵をり畔の花ハ草
十五 人のミち天ほとゝ碑へ行所よ
朱路の枝も路よの見え
七 古龍山寺いかなる田くより
所よ無水よぬくも曲水
八 春のて加田よ淋しく織立て

春のるに田よ淋しく織立て
十 前渡りきるもとの風流士
渡んゝかも摘捉も君か情
十 辻か花見ゝ音色を見る
辻か花見ゝ音色をえる
七 紀行よ諸願成就の行脚塚
底德の盛徳もよく會解
十五 永なり日よ西明の
也命識

月さやか風にむかへる簾の声
十二 小倉の袖に冠かくれし
第四　朱之上十六句
七 浪
簾を行帆にかゝる袖の浦
浪に旭を磨く　絶景
浪に旭をとぐ　絶景
十五 参宮の首途ながらも障有り

七 鰯の網にかゝる太刀魚
七 かけ網にふるひかゝる籾の雨
只柄斗有る空　鞘
七 袖のみに移りし菊の　蘭
雪解くゝり登る若鮎
七 まくとみえし末の色々く
流来る藪は枝にまる程
七 旅をいそへ帰る　網大

八
船をハかくす海の網大

八
竹に鶯の夜振に月も傾て

二見りの温泉に妻ならぬ妻を持る

十
閨によるのいま蛇除の札

ほしうが子しも西施の浦風

十二
琵琶の音ハまさる中の秋の声

ひともの音ハまさる中秋の声

十
松島もともに年を経る庵

前五　朱之上十七句

東風に綿子と念ふ里廻り

十
八景琉杭屏風の西施の去

蝸牛の藤ふ垣足の襟

七
下闇も咲卯の花の白明り

笠に一杯あふる摘草

十
一条車入面らかまき仮名変へ

更級山の月見て

七 素麺の滝かゝるや是月見ん

ねむさ久まさらぬ長居

七 信夫の里の恐ろしき雪車

信まの里の雪ふるや雪車

八 鵲

の巣をとるに遠しき星の影

星稀にして烏ハ南月ハ西

八 鳴やむ物凄きや森林の秋

ミな家渡月に灌く静か

○ 風流なるも我同じ園

花かゝる鶏花生の籠か

十五 羽立の地気の竹筆持つる

蛍ん手向へハ墨ぬる遠の闇

十五 母ハよの夜さみ沢雲

行御しのくる晴の外ケ濱

七 白ゆれる人ととある

麿ゝやしよば晴る夕立

○船絆よ大和かし紀の沖津浪

第六　集上　十一月

気知てき態をかんさし

○京人の男姿を慕ふかな

十 涼しさは幟も吹ぬく茶の店

硯の海に浮きハ京

いなもいさそ稲負鳥

○菊畑に日を閉る綾羅坊

十一 拾く螢のふしろ桃灯

寿の雲も淋しき古戦場

雨ゝよ草鍾の切れる川船

十二 つなし鰻窟の様子は背まくら

八
赤魚のあかりうつる秋の夜
瑠璃燈とちらし房の葡萄棚
越坂々人ゟ月影のさる軒
七
指那し津き根の草葉
松蔦し根本の小笹むら
十
天狗咄して居る草物
いとゝ淋しまゝ裏店の秋
十
念誦の同雲研水雲部

第七 集和上 十二月
竹椽の裏と流して溢れかゝ
七
岩鹿不レも魚る稲荷場
山路ありて家を起き寄り
十五
下ろの背に流の寺何る家内表富
安志むかしゝ中ゟ楞子規
○
根つよ葉瑚の鰻くれ月

あらぬ世の藥菓も泣ふ旅衣

十 三界塊を碎く 錫杖

おしくと今の無心の涙や冷え

八 若新行も年来想ふちぎ也

囲むる互を叢も

七 寐梅每の花色に隠る廉子吾谷

冬の櫻に頭うち 中ヰ

七 東山つる雪大尾も 泥川

第八 巻上 十四日

猶あて蔥し 錦の姫寄合

十二 生山に日して菓る 風の友

仏家志世中の四季の三浦屋

十 伽羅の香を嗅ぐ蔥し多指

伽羅の香呉嗅ぐ蔥し多さし

○ 鍼よりく 実をいらしく

草臥して晴ても仕方なき花

〇 見てハ遊さぬ関守の役

庭路の奥に紅葉ある垣

十 宮居をも此浦に汲ひく名残かな

みるや御法の響る音也露

〇 散る桜朽ハあひて菖蒲かな

秋さひしく囲炉の音する庵哉

十 菜にハ合ふ水も識る舗哉

春行の行末も無く窮

八 稀なる縁も古人の世事

淋しく宿る琵琶の連弾

八 槙掃尾の車に眠る黒杉

〆 七点 平句

八、十一句

十ヽ　十六円

十弐　七円

十五　七円

十八ヽ　七円

六十ヽ　二円

六弐　一円

〆　八十一円

外　五ヽ　二千六円

惣〆弟二五百〒十七円之

右宗
仙九殿
□□

あるじ
此丁語集し
世東世
菅之家

十八丞
雲晴と山の
周荷を淋中

其引
樹攙南山近
煙含北渚遥

山さうゝに雲井ふゝめる
わかくもんのかたて
おかしぬ日影なく
と

風流ぶり者し閑

あるよ(?)ぶり 男か履て 君かゝし

其二

羅襦寶帯為君解
燕歌蝶舞為君開

日くれはいとゞ山河をみつゝ(?)こえて
ちょうしみなしはて
こゝろもかくれなれ

十八

お白磨く中に晴るゝ色

船路より大和路のおもて浪

其引

題宮嶽 千里同文上 一層楼

日の出んしやかしこきかなゝその神

姉ゝよし里ほ もゝ咲けり

寄月恋
折ゝて
慈ゝかんさ

十八

千人の男姿も
草もなし

廿行

行ゝ行雲著蝉鬢
纖ゝ初月上鴉黄

よしの川いはきりとほし
ゆくみつの
おとにしも人を
おもひそめてし

十八

武右 伽羅の香と 嗅分兼 五指

色撥ね付 党をいふ

其引 己之底事教 狩由帰路鞍

王臣の衣女人よ 年々それ

かくかくても 何いふらん

其白ハ筆ふしき

腑て仕候まゝ見ら

十八

尺てハ遥なる

冪ゝの役

其外

中天懸明月令嚴

夜寂寥

吉野山をこえて行あまたの

関のあなたにて惜しし

聴きて

十八

むかしや
御意の碧?遊楽

散る桜秋(?)あめ
道し哉

其引
雲も恵も衣裳
(?)かな

花さそふ
花ぞと雪よ
咲とめる

留し白(?)
花るの(?)
山風

二十、

むら紀ゑ御樹

眼鏡業

問つし着も

あらぬ緑来

其ノ

窓前緑竹生空地

門外青山似旧時

山姫まいのもとあらぬもしや

されとくとまて

日有しみしく

二十、

[illegible]

[illegible] 子規

根つよき城の

[illegible]

其二

落日照大旗

馬鳴風蕭々

[illegible]

二十五、

菊

ちゝいなもしろきえま　猶有る

菊畑に日を

囲する　猿雖坊

其二

秋葉風吹黄颯々

晴雲日照白鱗々

ぬれ〳〵ふまし山路の菊野

香のかほりつゝ

千年をふ旅へゆかん

□

いまかしこき御恵ミにて
東都ハ百候所の外ニ満て
成周八百年の跡にもあらしと
永き代の基の萬世までも千
寿くことの八百里も違ぬ
よしをゆゝしく此巻の終を

光る東宮の戸却しゆく哉
みれハ禁裏の志けきさてさ言乃
玉を給ふ孫末帝の影を妙て
かしこくよし野初瀬の花盛ゟ
武蔵野の月乃ミかくす雲乃
あらし山こえてゆくいつてハいつく
雲の果迄ハいくも朽ぬゆ
庭のあんも又真なしと難波の

浦のよしあしをとらくとはなしに
須濱のまつ風の秋のあはれしらしと
おもふ句をしるへきをとは山人る
たゝし翁の風あるしらん
かへりぬるあなかしこ蕉祖
八百年の齢もたゝほとゝしるきに
緇友おのおの繋りこのつゝしと未来の
唯八百年ぬかぬかれと述るのみ

皆寛政九年
丁巳春二月日　東闌舎
羅文
□
□

川柳末摘花　第五

文化元甲子年秋八月十二日

羅文居士七回忌追薦の紀

著作堂誌

羅文居士七回忌追薦之俳諧連歌

文化きのとうしの年七月十あまりふつかの日ハ亡兄羅文居士の七回忌日なりけれバかねて其日ごろより俳諧の連歌をなん嗜みあそへハ蹤らひて蕉翁の流れ波を尋追善のむしろをひらくへしとかねて事もはからひしに障なりあるを俳友つどひ来り懇ろに助けてしかるに其名もみころさへあれバつどひたまへるなりけり今ぬこの十日ハ兄きみれ遠夜なりけれハわれにも馬琴ぬしまた額つき一念稱名の眼を閉つる事もなく像をみる路居し神主を祭るもいへいつわりの語をもあはれきくからなくおもふべきなり　柳神宮行をしる納文なんこともなし何みつ仏の六字をうのよにまかし表六章をかけもしまて寞いふ呉六如六道を脱

雑しき生死の六道を會得しあへ南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
なき玉の秋あきの実れ手向一の花
むしろ寄けむ法乃月影
あれしと船よ誠れ所の土に
ちらうり連れ残る野あるかな
古年の民時代に譲り分け富
仏を植ゑよ徹雨晴の空

○

文化新元甲子年秋八月十一日　家弟馬琴　謹記

この頃芳艸亭のぬし良業に苦しみあつくしきぞ
篭居しぬる折なるも花月にかゝる事を忘れて追福を発句を

寄せよとすり盞や芳艸亭の俳名は孤遊遠山氏字八郎
左衛門とよ八十六年君時下大消役家の人也
百八句をも珠数のまちにけふ日ごと同事俳
ともちんして俳諧百八句の独吟して評を与ふる
去年の冬なりけるとのぬしが方の目子とわか居る所あるく
なみ亡友の数をかぞへてかゝる風流の手向をうられ
きへ汀のさ恵のちらうんきえともなるくて伏蝉の凡とる
しるこその甲乙を定ゆるるのみなんあかる

羅文居士七回忌追福獨吟百韻
芳艸亭　孤遊

羅綺さし絶ぬ哥森の菩薩や秋の蝉
文推のぬしを追慕乃月

二　菱の花むらさき乃雲とかゝりけり
一　姓下地の湯みをまする音
一　あらるに左々馬乃行後か
一　このかはされるつ枚とこれ登
一　紀りをおもてそのむかしこゝかり
一　小暑ミ雨に鉢乃室咲
五ゥ　本後の清札集まる夕茶師
一　入日照深く素家哉りくし
五　河原の古気に擬て郭（サト）詞
一　毒の怪まれの篝くてものく
一　素さらにならくちむる鐘供養
二　勅使設にうつる舟鵜

三　突几の文字あさやかに月晴れて
一　凪の方に入る津の山越
一　名高の持に挟る十団子
五　松りの宿にしげる園
一　近造作に瓶をふるふ花銭さる
一　種をいなめり咒の桃栗
一　咲く茎れ花もおとしての絆を乞ふ
一　藪入去庵に簑の雛
三ヲ　雛棚の奥に艶しき川芎香
五　二十の眉の超（セナ）ほしけなる
七　貧乏の名を系図に西いしま（のまちらるれ）
一　積りても凄く見ゆれ　正宗

一 うへまよこ乎まの謠よ妻乃虎
一 氷豆腐まこれ名物・
一 霊車棄て三里ゆ毎ㇵ一囲碁の緒
三 葛飾美里乃襄方親雉医肩
五 黄居の仲人口も荒気子
一 八一百あ一振り一ある松
一 月ゐくさを文ね篁一筍の小室節一
一 入船をし免ハ一起きて仁政
一 秋乃田の莇種のときに月の出
一 借り来拾乃どくら眺るる
七 宮桐・撲、秋胞ゟ庭を墓跡一
十五 伊与の湯ゆらし積まし一結

一 三絃ひくまちを語るしのひくま
五 六人城ゐなる萱の末桜
一 罾り一網のふ負ひ一舟えれて
一 涼ま風ひ一むかよ月・ゐろ
一 陀羅ひ一久まゆし一さ此纖のこゝろも
一 伽藍成就も多力ながら
巻向の橋をうら一を茶そう免
一 新都一貢のこゝろ近江の
三 師走もいそれのくるし一車牛
二 暦の尻ひ一一荷とられ
五 蓮葉を帰る詞比されのる
一 いつもとのゝし一一とる百女

糸ゆふの網をもちて来るおりし
繋馬下向に立ゐ山こゝか
明月のあかり海の桟婚鹿めく
ひとよの尺鹿と讃る白髪
夢るとしの矢数に挑む後の弓
十夜箆に弁に嫡の網
帰るつまに持てくる日和に瓣
羽根菖いつく夜こゝろの出来
子播その孫をなくて菊算
糸支度乃衣裳綺かれ
おかれ智恵を絞くしても汗拭ひ
職る暑サの扇なるし

皐の月部八九の鶸すくへ
菖蒲の節を菊尾州の家
新居の自刎不挿袖うら
垣越しうのむ蚊乃こゝ香
附き合れなれしの中へなく
淡くも庭を安し小雀
葉しきまりて新居の夕風に
そやして泊りて風呂の先陣
いかめしき晃此中に玉襷
生るかことを手絵馬の兇範
肩車て花不老に曹子
竹鉢の窗も伝ひ江の春

胜八花の波右の捏かゝる月
白くも苦患す登るこのけるよ
別荘す来と寺の名誦し
仇ならぬ娶の連り
蝶帰の蝶す信なる方を倦く
虎ヶ石見据しなる法体
ちんまりと宮をあはれ山のへつ
以別一の夜劉ぬ娘を来る猿
彼別の便りつかるる席連歌
一巡する己待縁中
飲まで来る生渕を光るさくし網
気も夜縮ぬを吹かくる東風

御所のお乱果しるまでくく
琵琶めつしし遍くの蓄る
年来とく東間の関の藤を揚
後も殺して羅旅の句下凝
芋汁の枝子果穀も吉の月
康と称れ里陽つ里
詩弓の哉秋暁ゆるお学の功
後の紀急と他る残魚の巣
撫香すいとく大用の風ぐ須る
包ろれ伸安をかり恋の西民
星も七会かさまかるく
遊びの幕ちやくし汐ゝ妻

三 五 一 一 一 五 二 三

吉祥の出づれは浮かるゝ亀の子

千部ゝある百の鳴かん

宝具八句

一葉さへのおちる田舎ゝゝ

流揮かゝ筆先る跳

音かゝ前後ちろしの小指さ

若紫照るへ猫居瞬ゝ

夜ても起ても美の世之ゝ

己分段仕すれ樽の楽

明日の脂無くて廉の毛出し

紅葉ゝ付かる面も独り

右百韻好れし年の十月廿九日の日評しをわく

久方本ゝゝゝゝゝつゝゝる

曲亭主人

一のくれ月々美しう川見ゆる其の色ふり

乱れまてゝゝ袖ゝゝ去ゝゝ

○

芳卯亭の如しゝゝかゝ居のゝゝゝ中

つゝゝる

うしやましゝ繋も一つのゝ西斗ゝの妖

こ代を八月の消えるおつけさゝゝ